

平成31年2月13日

中央教育審議会 大学分科会 教学マネジメント特別委員会

第3回資料

立命館大学 教育開発推進機構

沖 裕貴

DP、CP、APとは

- ◆ **ディプロマ・ポリシー(DP)**:「卒業認定・学位授与に関する基本的な方針」=「**学部・学科が教育活動の成果として学生に保証する最低限の基本的な資質を記したもの**」
- ◆ **カリキュラム・ポリシー(CP)**:「教育の実施に関する基本的な方針」=「DPを保証する**体系的と整合性**が担保されたカリキュラム」
- ◆ **アドミッション・ポリシー(AP)**:「DPに沿った学生募集の方針と入学者選抜の方法」

DPとCPの明示化の方策

PLAN

体系性、整合性、適切性

適切性(具体的な人材像)

体系性・整合性

適切性(授業形態、
授業方法、授業配置)

適切性
(成績評価基準、成績評価方法)

CHECK

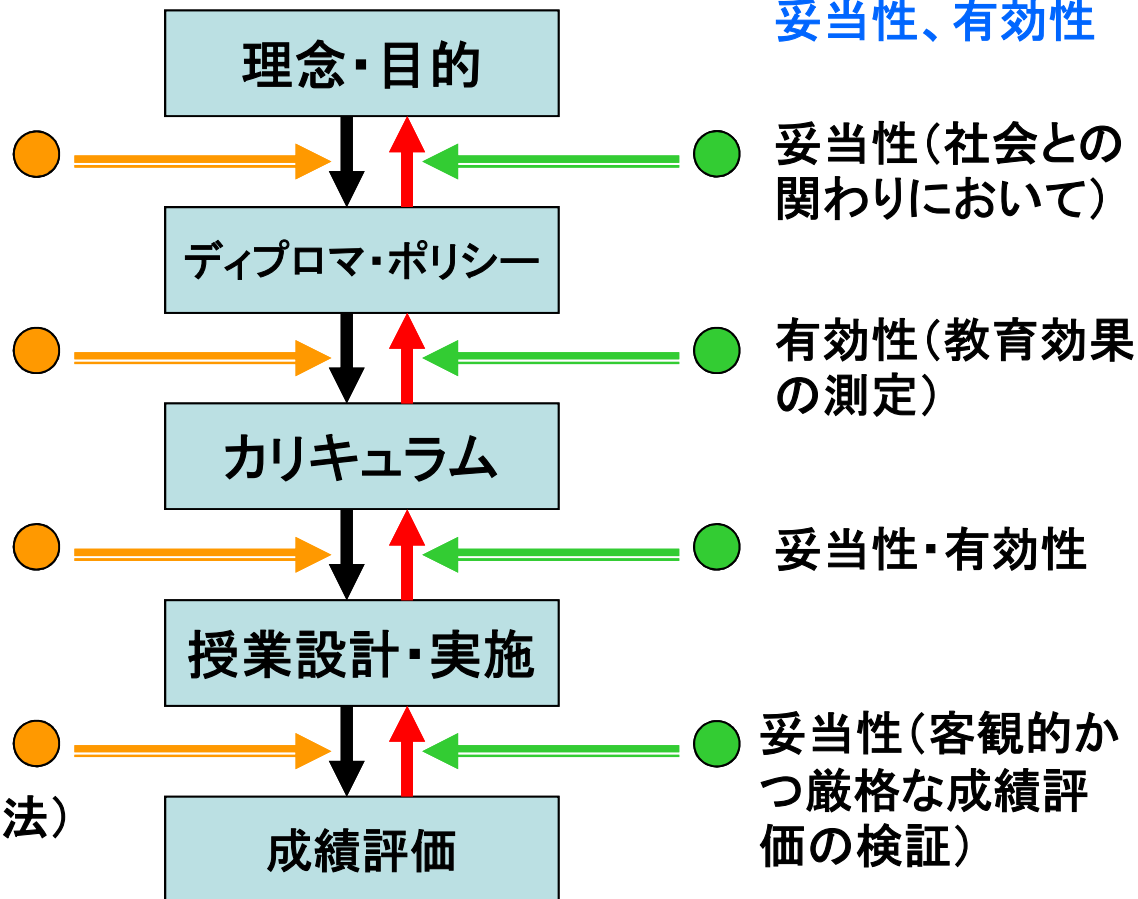
妥当性、有効性

妥当性(社会との
関わりにおいて)

有効性(教育効果
の測定)

妥当性・有効性

妥当性(客観的かつ
厳格な成績評価
の検証)



アセスメント・ポリシーとは

PLAN

カリキュラム・ポリシー

適切性(具体的な人材像)

体系的・整合性

適切性(授業形態、
授業方法、授業配置)

適切性
(成績評価基準、成績評価方法)

CHECK

アセスメント・ポリシー

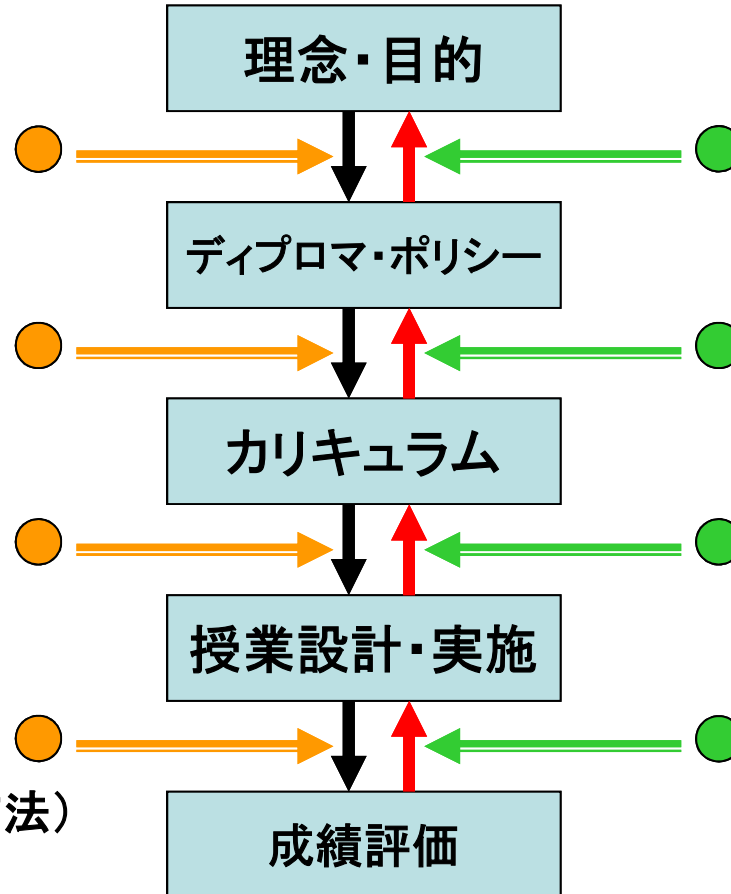
妥当性(社会との
関わりにおいて)
機関レベル

有効性(教育効果
の測定)
プログラムレベル

妥当性・有効性

妥当性(客観的かつ
厳格な成績評価
の検証)

科目レベル



DPとCPの明示化の方策

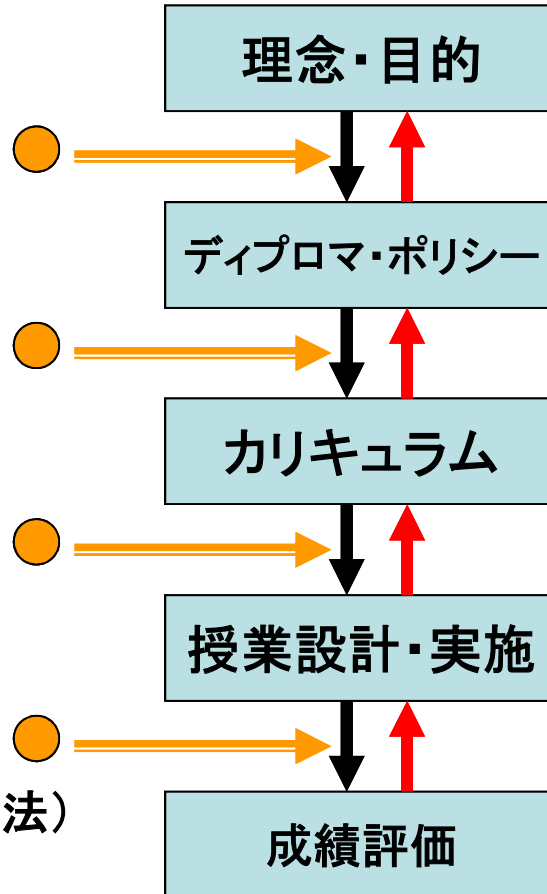
体系性、整合性、適切性

適切性(具体的な人材像)

体系性・整合性

適切性(授業形態、
授業方法、授業配置)

適切性
(成績評価基準、成績評価方法)



具体的な取組

各学部・学科での
観点別人材養成像(DP)
の策定と公開

カリキュラム・マップ、
カリキュラム・ツリーの
策定と公開

観点別の到達目標
を備えたシラバスの
策定と公開

観点別到達目標
ごとの成績評価基準の
策定と公開

観点別人材養成像（DP）の例

滋賀県立大学工学部電子システム工学科

- A 人間存在と環境・社会について深く理解し、豊かな人間性を身につけること
 - A-1 人間の心身および人間と自然や社会とのかかわりなどについて、興味に応じて多面的に学習し、複雑化・流動化していく現代社会の中で将来の指針を見出していく能力を身につけること
 - A-2 技術が環境や社会に与える影響について理解し、技術者としての責任感と倫理観を身につけること
- B 国際的に活躍する地球市民に必要な外国語によるコミュニケーション能力の基礎を身につけること
- C 電子システム工学分野の基礎となる数学、物理学、化学および情報処理技術に関する知識とそれらを応用する能力を身につけること
- D 電子システム工学分野の幅広い基礎知識を習得し、さらにそれらを基礎として高度な専門知識を身につけること
 - D-1 電気・電子・情報工学をカバーする電子システム工学分野の幅広い技術について、基礎知識とそれらを課題解決に応用する能力を身につけること
 - D-2 電気・電子・情報工学をカバーする電子システム工学分野の幅広い技術の中から興味に応じて選択した個別技術について、高度な専門知識とそれらを課題解決に応用する能力を身につけること
- E 電子システム工学分野の実験、実習の実践を通して、工学課題を設定・遂行・解決する能力を身につけること
 - E-1 電気・電子・情報工学をカバーする電子システム工学分野の幅広い実験の計画遂行能力と、結果の解析・考察・説明能力および報告書の作成能力を身につけること
 - E-2 電子システム工学分野の技術者に要求される課題の理解力と、与えられた制約下でその工学的な解決法を見つけだして計画的に仕事を進め成果としてまとめる、エンジニアリングデザイン能力と実行力を身につけること
- F 自分の論点や考え方について論文や口頭でわかり易く論理的に発表しディスカッションを行う、コミュニケーション能力を身につけること
- G 技術者としての明確な目的意識を持ち、生涯にわたって自発的に学習する能力を身につけること

観点別人材養成像の例

ハーバード大学(コア・カリキュラム、1988)

「関心・意欲・態度」

- ◆ 違った価値観や伝統や制度を持った異文化に関して深い認識を持つことができる。

「思考・判断・表現」

- ◆ 明晰かつ批判的に思考することができる。
- ◆ 自然と社会と人間との関わりを理解し、知識を得る方法と考え方を説明することができる。

「技能」

- ◆ 正確に意思の疎通を図ることができる。
- ◆ コンピュータ等を用い、数量的な処理を行うことができる。
- ◆ 一つ以上の外国語を用い、コミュニケーションすることができる。
- ◆ 正確に書くことができる。

「知識・理解」

- ◆ 正確に理解することができる。

(注) 上記のものはBok学長が示した能力を沖が観点別に整理したもの。

DP策定の留意点

1. 4年間の学士課程教育で保証する最低限の学習成果を項目として記述すること。
2. 領域別、観点別、学力の三要素別、あるいは学士力別に、学生を主語にして「～できる」という行為動詞で記述すること。
3. 建学の精神や全学、学部、学科の教育目的とDPの整合性をとること。
4. それぞれの項目は、どの科目群で育成するかを考えておくこと。
 - カリキュラム・マップ
 - カリキュラム・ツリー } カリキュラム・ポリシー
5. それぞれの項目は、どのように達成度を検証するかを考えておく必要(教育効果の測定)があるが、それをDPに明示する必要はない。

DPとCPの明示化の方策

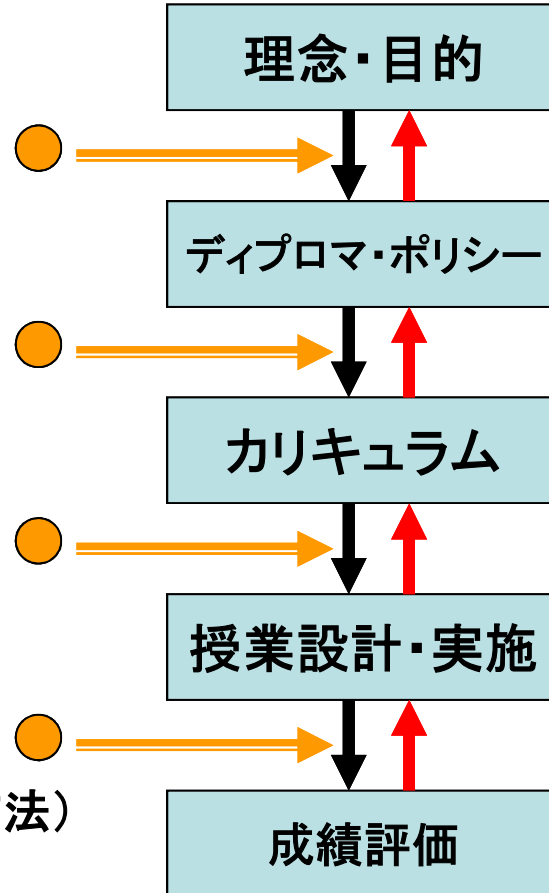
体系性、整合性、適切性

適切性(具体的な人材像)

体系性・整合性

適切性(授業形態、
授業方法、授業配置)

適切性
(成績評価基準、成績評価方法)



具体的な取組

各学部・学科での
観点別人材養成像(DP)
の策定と公開

カリキュラム・マップ、
カリキュラム・ツリーの
策定と公開

観点別の到達目標
を備えたシラバスの
策定と公開

観点別到達目標
ごとの成績評価基準の
策定と公開

科目の観点別到達目標の例

「芸術論特殊講義」(山口大学の例 by岩部センター長)

◆授業の概要

この講義では、2008年度に開催される展覧会を紹介します。特に企画趣旨や出品作品、作家について解説します。

◆授業の一般目標(GIO)

- (1)幅広い分野の作品に親しむ。
- (2)各展覧会の企画趣旨について理解する。
- (3)美術展や美術館の制度と背景について理解する。

◆授業の到達目標(SBO)

1. 認知的領域: 知識・理解

- (1)基礎的な美術史の用語を理解し、それを用いて作品を説明できる。
- (2)企画展、常設展、公募展、巡回展、回顧展、テーマ展などの展覧会を区別できる。

2. 認知的領域: 思考・判断・表現

展覧会の企画趣旨を読み解き、それに対する自らの考えを述べることができる。

3. 情意的領域: 関心・意欲・態度

県内・国内で開催されている展覧会情報を集めて、心の琴線に触れた展覧会を見に行き、企画趣旨や作品について批評することができる。

科目の観点別到達目標の例（シラバスへの反映）

到達目標	評価手段	評価比率
①基礎的な美術史の用語を理解し、それを用いて作品を説明できる。	定期試験 (60%)	20%
②企画展、常設展、公募展、巡回展、回顧展、テーマ展などの展覧会を区別できる。		15%
③展覧会の企画趣旨を読み解き、それに対する自らの考えを述べることができる。		25%
④県内・国内で開催されている展覧会情報を集めて、心の琴線に触れた展覧会を見に行き、企画趣旨や作品について批評することができる。	課題レポート (40%)	40%

成績評価の例

課題レポートの問題例と第2段階ルーブリック(加点法)

- 到達目標: ④県内・国内で開催されている展覧会情報を集めて、心の琴線に触れた展覧会を見に行き、企画趣旨や作品について批評することができる(課題レポート40%)。
- 問題例: 「展覧会を見に行き、企画趣旨について自らの考えを述べるとともに、美術史の用語を用いて気に入った作品5点について批評しなさい。なお、レポートは5000字程度にまとめて、パンフレットとともに提出すること」

評価規準(↓)	0	1	2	3
企画趣旨に対する自らの考えを述べるができる。	企画趣旨に対する自らの考えを適切に述べていない(0点)。	いくつかの間違いはあるが、企画趣旨に対する自らの考えを最低限述べている(1~5点)。	大きな勘違いがなく、企画趣旨に対する自らの考えをほぼ適切に述べている(6点~10点)。	完璧に企画趣旨を読み取り、それに対する自らの意見を適切に述べている(11点~15点)。
正確な美術史の用語を用いることができる。	用語の間違いが3つ以上ある(0点)。	用語の間違いが2つある(2点)。	用語の間違いが1つある(4点)。	用語の間違いが全くない(6点)。
作品の特徴を適切に指摘することができる。	作品の特徴を指摘できていない(0点)。	作品5点中1点ないし2点について適切に特徴を指摘できている(2、4点)。	作品5点中3点ないし4点について適切に特徴を指摘できている(6、8点)。	作品5点とも適切に特徴を指摘できている(10点)。
論理的な説明ができる。	論理的な文書になっていない(0点)。	作品5点中1点ないし2点について論理的な文書になっている(1、2点)。	作品5点中3点ないし4点について論理的な文書になっている(3、4点)。	作品5点とも論理的な文書で説明している(6点)。
誤字脱字がなく、段落も明確で読みやすい文章を書くことができる。	誤字脱字が5カ所以上あるか、段落が不明確な箇所が5カ所以上ある(0点)。	誤字脱字が3、4カ所あるか、段落が不明確な箇所が3、4カ所ある(1点)。	誤字脱字が1、2カ所あるか、段落が不明確な箇所が1、2カ所ある(2点)。	誤字脱字もなく、段落も明確につけてある(3点)。

「現代の教育」レポート試験ルーブリック（沖）

「①現代の教育の諸問題について、その背景や原因、検討すべき課題を指摘できる」「②現代の教育の諸問題について、教育学的な視点に基づき、解決法や対処すべき課題に関して自らの意見を述べることができる」「③ 教育に関して興味関心を持ち、自ら調べ、考える態度を持つ」の3つの到達目標に対応。課題:「現代の教育の諸相1～14に関して、一つもしくは関連する複数のテーマについて、いくつかの文献に当たり、多角的に考察し、自らの意見を述べなさい。 図表を含めA4 二枚以上三枚程度、5,000字程度で50点満点とする。」

	Poor(F)	Beginning(C)	Developing(B)	Accomplished(A)	Exemplary(A+)
取りあげたテーマに関して自らの考えを述べている(23点満点)。	<ul style="list-style-type: none"> ◆問題意識(仮説)がなく、何を論じたいのかが不明確である。 ◆他人の意見ばかりで自らの意見がほとんど述べられていない。 ◆レポート試験課題に関係のない論考である。(0～5点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆問題意識(仮説)が不明確か、ありふれている。 ◆参照した一部の文献に引きずられた形で自らの主張をまとめている。(6～10点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆問題意識(仮説)は述べられているが、反証が十分に調べられていない。 ◆結論がありふれたものになっている。(11～15点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆自らの問題意識(仮説)に基づき、賛否両論の文献に当たり、自らの考えをまとめているが、結論の新規性、独自性あるいは説得力にやや難がある。(16～20点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆興味深い切り口(仮説)で問題点を指摘し、十分な量の根拠と独自の思索に基づき結論を導いている。(21～23点)
根拠に基づき、論理的な説明ができている(12点満点)。	<ul style="list-style-type: none"> ◆情緒的な文章が続き、まったく論理的な説明ができている。(0点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆根拠を示していないところが一部あるか、根拠を示しているも参照したデータや文章の意味を取り違えたり、論理的な説明ができなかったりする。(1～3点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆根拠を示しているが、読み手を納得させる書き方や結論となっていない。(4～7点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆根拠に基づき、説得力ある説明がほぼできている。(8～10点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆根拠と論理に基づき、正確かつ説得力のある説明ができている。(11～12点)
引用文献、参考文献を巻末に明示し、自らの意見と区別している(7点満点)	<ul style="list-style-type: none"> ◆引用文献、参考文献がまったく明示されていないか、盗用、剽窃の可能性が高い。(0点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆引用文献、参考文献が一部明示化されているが、どこまで自分の意見かが不明確な箇所が複数箇所見受けられる。(3点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆引用した箇所に文献が(全部あるいは一部)明示化されているが、巻末に指定した方法で文献一覧が明示されていない、あるいは明示されていないものがある。 ◆文献一覧はあるが、文中の引用箇所に全部あるいは一部文献名が盛り込まれていない。(5点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆引用文献、参考文献がしっかり明示化されており、指定した方法で文献一覧が明示されている。(7点) 	
誤字脱字がなく、段落も明確で、読みやすい文章となっている。また、レポートの体裁(要約、図表の番号、章・節の番号、分量)が適切である(5点満点)。	<ul style="list-style-type: none"> ◆誤字脱字が3つ以上あるか、段落が区切られていない箇所が3箇所以上ある。 ◆レポートの体裁がまったく試験レポート執筆要領に沿っていない。(0点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆誤字脱字が2つ以上あるか、段落が区切られていない箇所が2箇所以上ある。 ◆レポートの体裁が試験レポート執筆要領に一部沿っていないところがある。(1点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆レポートの体裁は試験レポート執筆要領に沿っているが、誤字脱字が1つ以上あるか、段落が区切られていない箇所が1箇所以上ある。(3点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆レポートの体裁が試験レポートの執筆要領に沿っていて、誤字脱字がなく、段落も明確で、読みやすい文章となっている。(5点) 	
「だ・である」体で統一して書かれている(3点満点)。	<ul style="list-style-type: none"> ◆「だ・である」体で書かれていない箇所が3カ所以上ある。(0点) 	<ul style="list-style-type: none"> ◆「だ・である」体で書かれていない箇所が1カ所以上ある。(1点) 		<ul style="list-style-type: none"> ◆「だ・である」体で統一して書かれている。(3点) 	

科目の観点別到達目標の例

「線形代数」(理系基礎科目)

◆授業の概要

本授業では、行列と行列式の基本的な概念と計算について解説し、線形代数の入門を図る。

◆授業の一般目標

- (1) 行列の概念を理解し、基本的な行列の計算方法に習熟する。
- (2) 行列式の基本性質を理解し、基本的な行列式の計算方法に習熟する。
- (3) 線形空間の概念を理解する。
- (4) 線形代数の様々な概念や手法を、統計学やコンピュータをはじめ、他の学問領域で積極的に応用する態度を持つ。

◆授業の到達目標

1. 認知的領域: 知識・理解

- (1) 連立一次方程式を行列を用いて解くことができる。
- (2) 行列式の基本性質に基づき、行列式の計算が正確にできる。
- (3) ベクトルの一次独立、一次従属、ならびに線形空間の基底、次元の概念を説明することができる。
- (4) 行列の固有値、固有ベクトルを求めることができる。
- (5) 対称行列を対角化することができる。

観点別到達目標作成の留意点

1. DPとの関連で科目の到達目標を設定する。
2. 成績評価を行うものだけに厳選する。
3. 15回の授業の終わりにできるようにしてもらいたい行動や状態(合格することで身に付く力)を、**学習者が主語**で「○○できる」という形式で書く。
4. 「理解する」などの概念的な言葉でなく、観点別の「行為動詞」を参照して、できるだけ観察可能な行動で表現する。
(例)「江戸時代のしくみを理解する」→「江戸時代のしくみを図解できる」、「乗法の意味がわかる」→「乗法の意味を表す作問ができる」
5. 領域別、観点別、あるいは学力の三要素別に、できるだけ単文で表現する。

DPとCPの明示化の方策

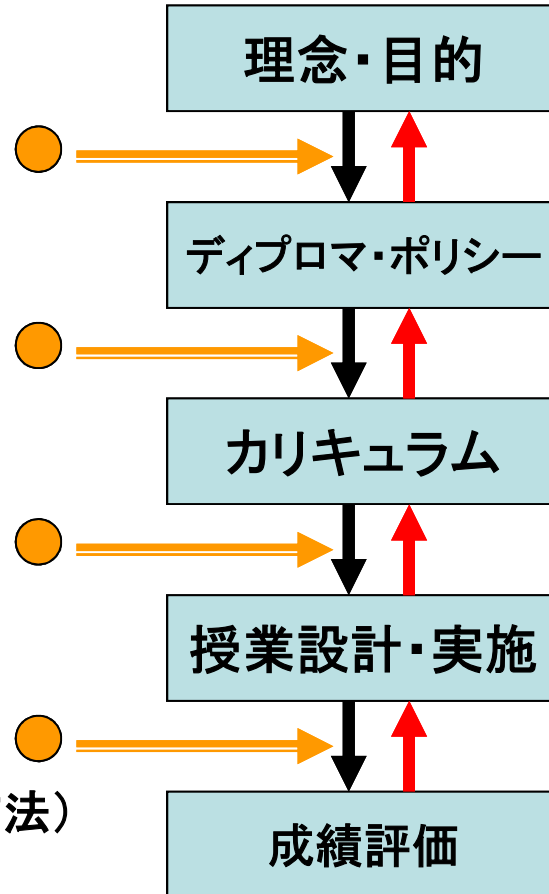
体系性、整合性、適切性

適切性(具体的な人材像)

体系性・整合性

適切性(授業形態、
授業方法、授業配置)

適切性
(成績評価基準、成績評価方法)



具体的な取組

各学部・学科での
観点別人材養成像(DP)
の策定と公開

カリキュラム・マップ、
カリキュラム・ツリーの
策定と公開

観点別の到達目標
を備えたシラバスの
策定と公開

観点別到達目標
ごとの成績評価基準の
策定と公開

カリキュラム・マップ、ツリーとは

- 大学設置基準大綱化(1991)以前は、大学設置審議会が各学部・学科の標榜するディシプリンに即して必要な科目(名)と内容を審査。
- 1991以降は、各大学が自由にカリキュラムや教育内容を制定。
- 各大学、学部でカリキュラムに関する整合性や体系性・系統性を自ら点検。それこそがカリキュラム・ポリシー(CP)の根本的な意味。
- 学位プログラムごとに作成することが基本。
- 点検項目は、①**目的(DP)**、②**scope(カリキュラム・マップ)**、③**sequence(カリキュラム・ツリー、ナンバリング)**。

カリキュラム・マップ、ツリーの 作り方と見えてくる問題点

- 学位プログラムごとに科目（科目名、必修・選択別、到達目標）の一覧表を作成し、教授会の際や、非常勤講師には出勤簿の押印の際に自らの科目のマッピングを行う。
- マッピングは主要な到達目標1～3つについて行う。
- 到達目標が観点別等で行動目標として書かれていることが大前提。
- 見えてくる問題点の第一は整合性（それぞれのDPの項目が十分な科目でカバーされているか、特に選択科目の取り方によって過不足はないか）、第二は到達目標とDPの妥当性（すべてのDPの項目にマッピングされている科目はないか、成績評価と対応しているか）
- カリキュラム・マップで整合性が確認できたら、系統性・体系性を示すカリキュラム・ツリー（履修系統図、ナンバリング）に進む。ワーキング・グループ等で検討することが基本。
- 組織として学位プログラムを点検・評価することがFDの基本。

その他の重要なキーワード

- シラバス執筆要領の充実(特に到達目標の書き方、到達目標と成績評価方法との整合性)。
- シラバス点検の実施(非常勤、新任教員)。
- 科目概要、科目の到達目標の統一(科目担当者会議)。
- DPの周知と点検。
- DP、CP、APは定期的に見直すべきもの。
- 教学ガイドラインの策定(学部・研究科の執行部は入れ替わる！DPやカリキュラム・マップ、ツリーとDPの達成度、学習成果をもとに見直す)
- 客観的かつ厳格な成績評価はパフォーマンス評価が基盤
- エビデンスに基づいた教育改革の定着。

(資料) カリキュラム・ツリー例

滋賀県立大学工学部電子システム工学科

電子システム工学科 学習・教育目標を達成するために必要な授業科目の流れ

学習・教育目標	授業科目名											
	1年		2年		3年		4年					
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
A-1	人間学概論	健康・体力科学Ⅰ	健康・体力科学Ⅱ	「人間学」の必修科目以外から4科目選択必修								
A-2	理工マネジメント概論							技術者倫理				産業技術マネジメント
B	第一外国語Ⅰ 2選1 第一外国語Ⅱ 2選1 第二外国語Ⅰ 2選2		第一外国語Ⅲ 2選1 第一外国語Ⅳ 2選1 第二外国語Ⅱ 2選2		科学技術英語							
C	情報処理演習Ⅰ 微積分Ⅰ 線形代数Ⅰ 基礎力学 基礎化学 分析化学	情報科学概論 確率統計 微積分Ⅱ 線形代数Ⅱ 物理学実験 基礎電磁気学 基礎電気電子回路 電子と化学結合	情報処理演習Ⅱ 工業数学 微積分統論 微分方程式 無機化学Ⅰ 分析・環境化学実験		工業数理							
D-1	材料科学概論 機械システム工学概論 電子システム工学概論		電磁気学Ⅰ 電気回路Ⅰ 量子力学概論 情報理論 アルゴリズムとデータ構造 電子システム工学概論Ⅰ	電磁気学Ⅱ 電子回路Ⅰ 電気回路Ⅱ 半導体基礎 物性デバイス基礎論 ディジタル信号処理 コンピュータハードウェア プログラミング言語 電子システム工学概論Ⅱ	電気電子計画Ⅰ 電子回路Ⅱ 制御工学 電力工学Ⅰ 電気エネルギーシステム工学 半導体デバイス 情報通信工学 コンピュータアーキテクチャ コンピュータソフトウエア 電子システム工学概論Ⅲ	電気電子計画Ⅱ 電力工学Ⅱ 数値解析・数値計算						
D-2							電磁波工学 電子デバイス 電気機器 集積回路設計基礎 応用電子機器 マルチメディア インターネット工学	プラズマ工学 光エレクトロニクス パワーエレクトロニクス 集積化プロセス工学 ロボット工学				電気関係法規・施設管理
E-1	電子システム工学ゼミナール		電子システム工学実験Ⅰ	電子システム工学実験Ⅱ	電子システム工学実験Ⅲ							卒業研究
E-2						電子システム工学実験Ⅳ						卒業研究
F												卒業研究
G	電子システム工学ゼミナール		電子システム工学演習Ⅰ	電子システム工学演習Ⅱ								卒業研究

※1 英語必修。ただし、留学生は、英語および日本語から選択必修。

※2 ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、初智英語(留学生のみ)、英語(留学生のみ)、日本語(留学生のみ)から選択必修。

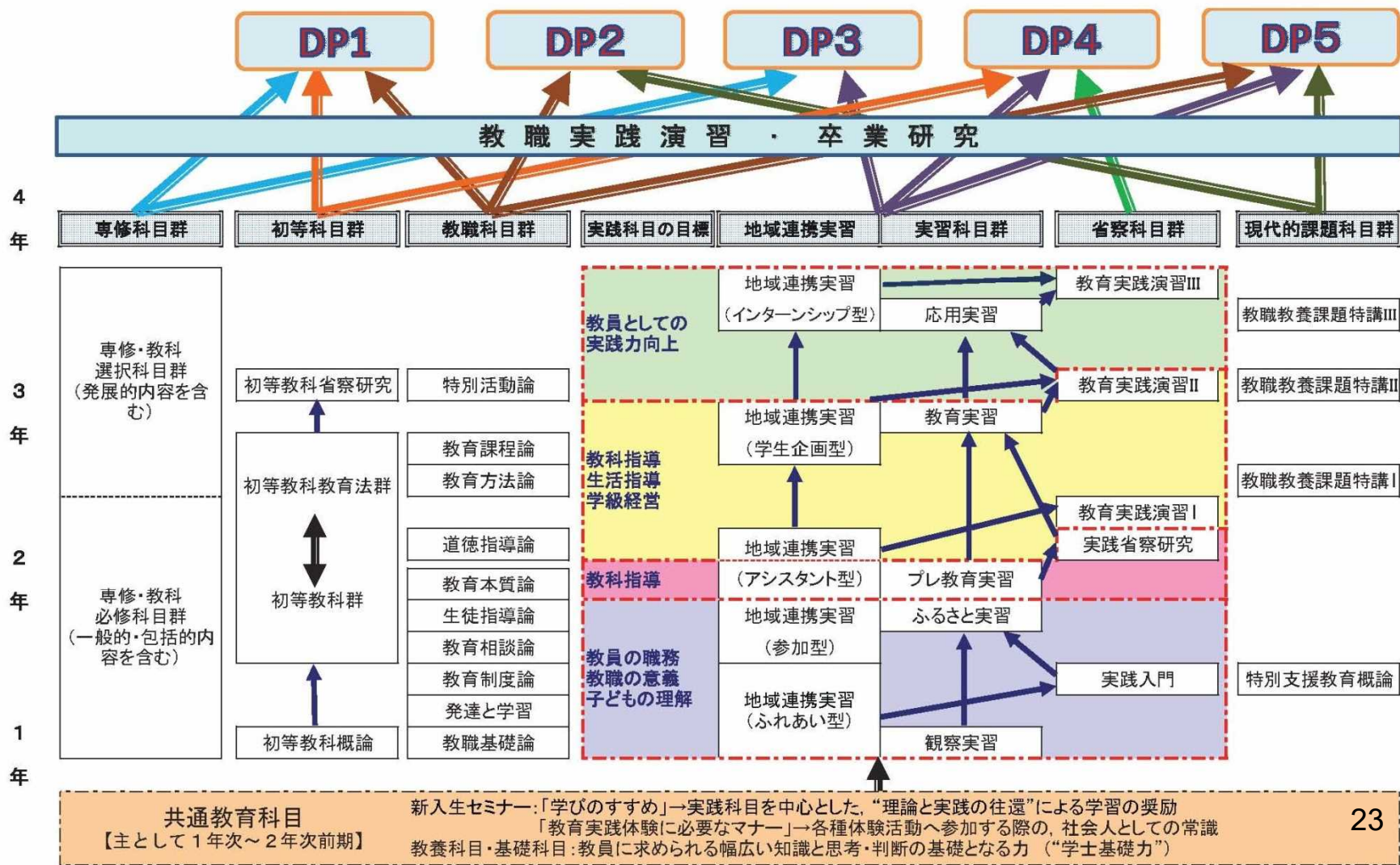
(資料) カリキュラム・マップ例

山口大学教育学部数理情報コース

			教育学部・数理情報コースのGraduation Policy(GP)					
授業科目名	授業科目の主題	授業科目の到達目標	数学の基本理論を理解し、数学的思考、計算等が適切に、かつ正確にできる	数理的現象や実際の身の回りの現象を数理的・数学的に考察し、分析することができる	文献および資料収集が必要に応じ、的確にできる	計算機について基礎的事項を理解している	プログラミングの基本を修得している	教育工学的手法の基本を理解している
情報処理演習	1. OSの基本的操作を学ぶ 2. ワードプロソフトの使い方を学ぶ 3. 表計算ソフトの使い方を学ぶ	1. ワードプロソフトを使って基本的な文書が作れるようになる 2. 表計算ソフトを使って簡単な表計算が出来るようになる。		1. △ 2. △		1. ◎ 2. ◎		
教育情報基礎	1. UNIXの基礎的な利用の理解 2. 数式を含んだ文書を容易に作成可能な文書整形システム LaTeX2 ϵ の利用法の理解	1. UNIXの利用者としての利用法を説明できる 2. 簡単なC Shellのプログラムを読んで理解できる 3. LaTeX2 ϵ を用いて数式を含んだ文書の作成法を説明できる					1. ○ 2. ◎ 3. △	
教育情報基礎演習	1. UNIXの基礎的な利用法の修得 2. 数式を含んだ文書を容易に作成可能な文書整形システム LaTeX2 ϵ の利用法の修得	1. UNIXを利用者として実際に利用することができる 2. 簡単なC Shellのプログラムを実際に作製できる 3. LaTeX2 ϵ を用いて数式を含んだ文書を実際に作製することができる					1. ○ 2. ◎ 3. △	

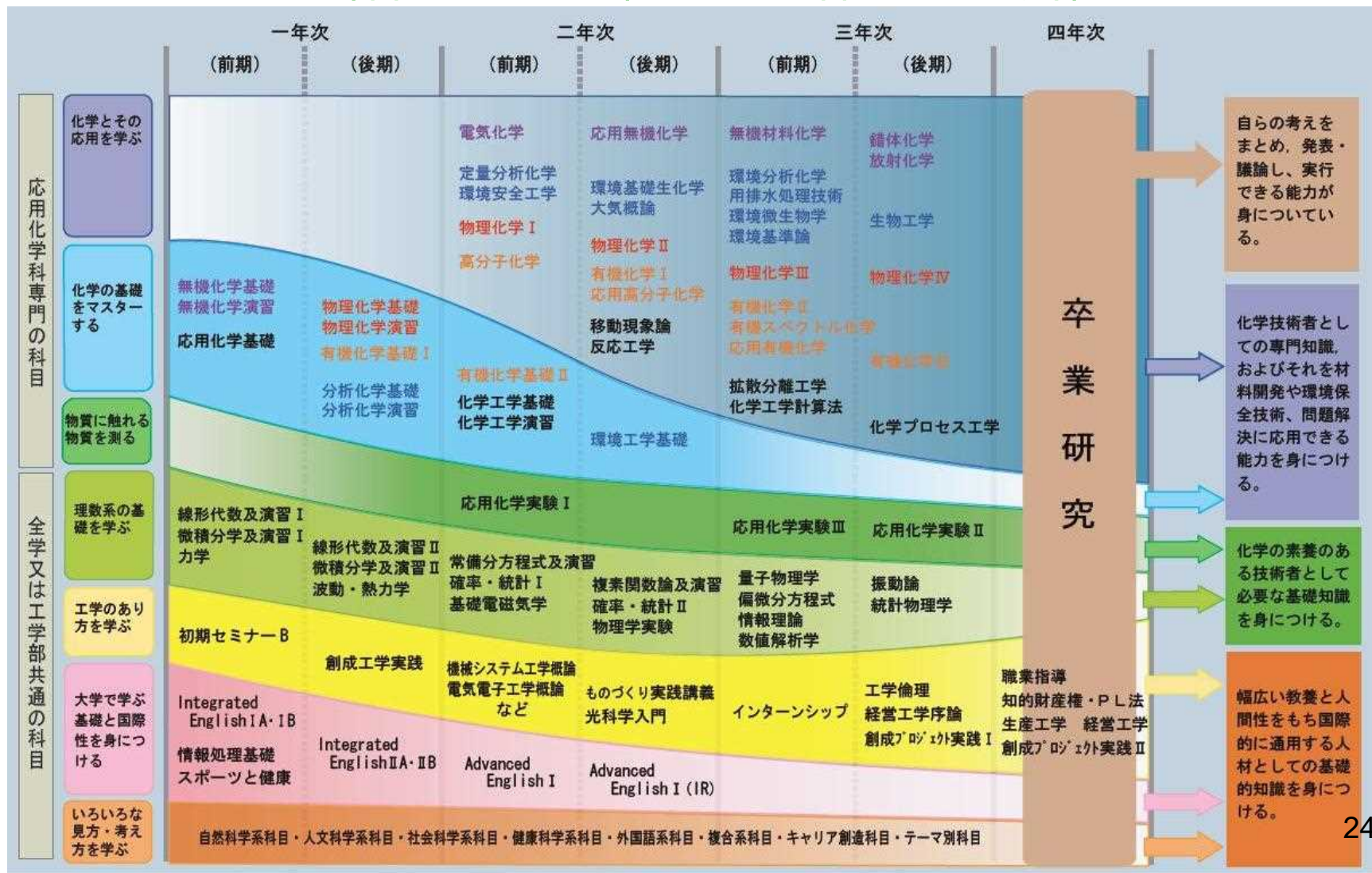
(資料) カリキュラム・ツリー一例

愛媛大学教育学部学校教育教員養成課程

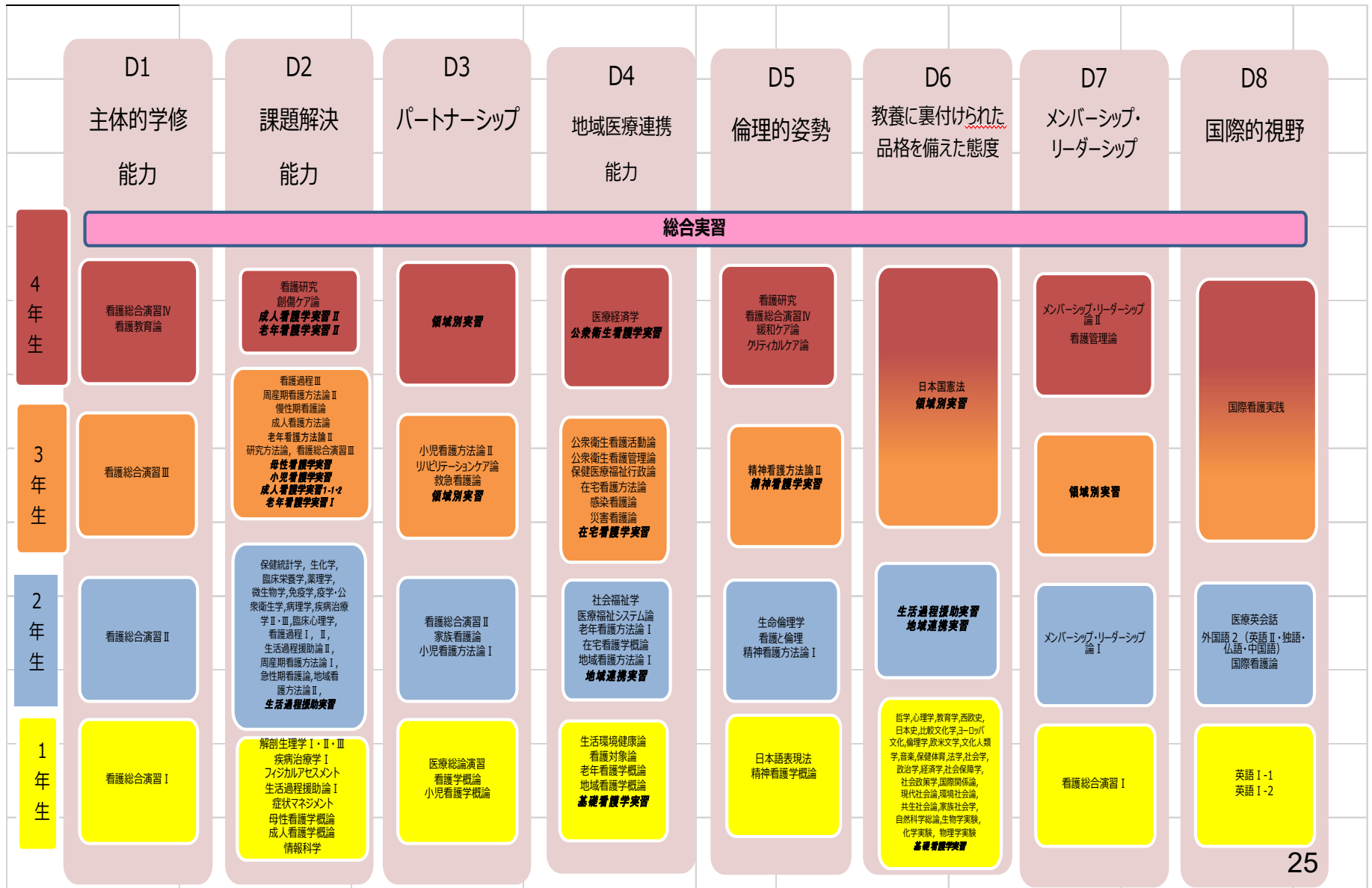


(資料) カリキュラム・ツリー一例

宇都宮大学工学部応用化学科(HPより抜粋)



(資料) 東京慈恵医大のカリキュラム・マップ/ツリー



(資料) 東京慈恵医大のカリキュラム・ルーブリック

D2: 課題解決能力	d1:人々の多様な健康課題を明らかにし、それらの課題を解決するための最善策を見出し、実践・評価し続けることができる。	L1	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人々の健康課題に関心をもつことができる。 2. 看護における課題解決プロセスを知り、その重要性を理解できる。 3. 看護における課題解決に必要な基礎的知識の重要性を理解し、修得できる。 4. 看護における課題解決に必要な日常生活援助技術を修得できる。
		L2	<ol style="list-style-type: none"> 1. 看護における課題解決に必要な専門的知識の重要性を理解し、修得できる。 2. 課題解決のために専門的知識・技術を活用し、必要な情報を選定し、整理できる。 3. 整理した情報を解釈し、課題を導き出せる。 4. 課題解決するための計画を立案できる。 5. 計画を実践し、評価できる。 6. 根拠に基づいた課題解決プロセスを実施できる。
		L3	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象や場の特性に応じて、課題解決のために知識・技術を活用し、必要な情報を選定し、整理できる。 2. 対象や場の特性に応じて、情報を解釈し、課題を導き出せる。 3. 対象や場の特性に応じて、課題解決するための計画を立案できる。 4. 対象や場の特性に応じて、計画を実施し、評価できる。 5. 対象や場の特性に応じて、科学的根拠に基づいた課題解決プロセスを実施できる。
		L4	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象や場の特性の広がりや複雑性に応じて、課題解決のために知識・技術を活用し、必要な情報を選定し、整理できる。 2. 対象や場の特性の広がりや複雑性に応じて、情報を解釈し、課題を導き出せる。 3. 対象や場の特性の広がりや複雑性に応じて、課題解決するための計画を立案できる。 4. 対象や場の特性の広がりや複雑性に応じて、計画の実施・評価が複数回行える。 5. 対象や場の特性の広がりや複雑性に応じて、科学的根拠に基づいた課題解決プロセスを実施できる。
	d2:研究成果を解釈し、看護実践に活用できるとともに一連の研究過程を実施できる。	L1	<ol style="list-style-type: none"> 1. 興味・関心のある文献を検索することができる。 2. 文献を読んで内容を理解することができる。 3. 看護における研究の必要性を説明できる。
		L2	<ol style="list-style-type: none"> 1. 科学的根拠(研究成果)の内容を理解し、活用できる。 2. 看護研究に必要な統計手法を理解できる。 3. 看護研究の必要性を理解できる。
		L3	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象特性に応じて科学的根拠(研究成果)を探索して看護実践に活用できる。 2. 研究の意義と方法を説明できる。 3. 文献レビューし自らの研究テーマを見出せる。 4. 倫理的に配慮された研究計画書を立案できる。
		L4	<ol style="list-style-type: none"> 1. 対象特性に応じて科学的根拠(研究成果)を看護実践に活用できる。 2. 立案した計画に基づいてデータ収集・分析までを実施できる。 3. 研究成果をまとめ、今後の看護実践に向けた考察ができる。 4. 研究成果を論文化し、発表できる。

参考文献・資料

- 沖裕貴「大学における教育目標の設定と達成度評価の基本的な考え方」山口大学大学教育機構『大学教育』第2号、2005年、1-16頁。
- 沖裕貴他「山口大学におけるグラデュエーション・ポリシーとアドミッション・ポリシー策定の基本的な考え方について」山口大学大学教育機構『大学教育』第3号、2006年、39-55頁。
- 沖裕貴「観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造－理念・目標、ディプロマ・ポリシー、シラバスとの関連において－」立命館大学大学教育開発・支援センター『立命館高等教育研究』第7号、2007年、61-74頁。
- 沖裕貴他「一貫性構築のための3つのポリシー(DP・CP・AP)の策定方法－各大学の事例をもとに－」日本教育情報学会『教育情報研究』第26巻第3号、2010年、17-30頁。
- 沖裕貴「大学におけるルーブリック評価導入の実際－公平で客観的かつ厳格な成績評価を目指して－」立命館大学教育開発推進機構『立命館高等教育研究』、2014年、71-90頁。
- 沖裕貴「3つのポリシーの策定と運用～一体的な策定と公表義務化を迎えて～」『日本私立大学連盟事例集』巻頭、2016頁。
- シャロン・ゾウ編著『世界の大学-ハーバード』成文堂、1997年、135頁。
- 中央教育審議会大学分科会大学教育部会『「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン』2016年。
- Dannelle D. S. & Antonia J. L. “Introduction to Rubrics”、Sterling、Virginia、2004.